

箱庭

内田康夫



はこにわ
箱庭

うちだやすお
内田康夫

© Yasuo Uchida 1997

1997年3月15日第1刷発行

1999年10月29日第7刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-263369-8



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



内田康夫

目次

プロローグ ————— 7

第一章 兄嫁の秘密 ————— 20

第二章 巖島神社 ————— 74

第三章 コツペリア ————— 106

第四章 紅葉谷公園の墓 ————— 145

第五章 ダイシンヴィラ303号室 ————— 191

第六章 幸福な風景 ————— 237

第七章 警察不信 ————— 288

第八章 物的証拠 ————— 339

第九章 落日はまた昇る ————— 396

エピローグ ————— 475

自作解説 ————— 480

箱庭

プロローグ

宮島町役場は港から街中へ五百メートルばかり入った、山裾のような場所にある。かなり豪勢な鉄筋コンクリート四階建てだが、観光課だけは独立して、宮島フェリー港の大きな建物の二階に間借りしている。宮島を訪れる観光客のすべてが、ここを通過して島内に入るのだから、このほうが業務を遂行する上で、何かと便利なのだ。

辻谷友理子が訪れたとき、観光課の職員はだれもがソワソワと落ちつきなく、窓の外の空模様ばかりを気にしていた。

「このぶんだと、だいぶん荒れそうじゃね」

課長の野崎は心配そうに言いながら振り返り、はじめて友理子に気づいて「やあ、どう

も」と手を上げた。

「参拝客のデータをお持ちしました」

友理子は権宮司ごんぐうじに託された大型の茶封筒を、野崎に手渡した。

「わざわざ申し訳ないですなあ」

観光課長は茶封筒の中身を取り出しながら言った。

「ことしはだいぶん、お客さんの数が増えとります。神社もお忙しいでしょう」

「ええ、夏休み期間中の人出はかなりのものでした」

テレビの連続ドラマで、平家一門の盛衰を描いた作品を取り上げたのが影響したのか、このところ、毎年のように来島者は急増しつつある。神社はともかくとして、旅館も土産物の店も活況を呈している。それはとりもなおさず町の繁栄そのものだ。

広島県佐伯郡宮島町は厳島全島いづくしまが一つの町で、人口はおよそ三千。主たる産業はもちろん観光——それも、厳島神社の存在がすべてとっていい。

「このぶんなら、ことしは記録破りの数字が期待できますなあ。それもこれも、なんとって神社のみなさんのお蔭です。宮司さんによるしゅうお伝えください」

観光課長はよほど嬉しかったのか、ただの内侍ないしにすぎない友理子にまで頭を下げ、お世辞を言ってから、気掛かりそうに窓の向こうを窺うかがった。

「それはそうと、風が強くなってきましたなあ。辻谷さんは寮じゃけえええけど、船で通う

とられるひとは、はよ帰ったほうがええですよ。さつき、連絡が入って、六時ごろには欠航になるいうことじゃけん」

「ええ、社務所でもそう言うてました」

間欠的に強く降る雨は、いまのところやんでいるけれど、午後三時を回ったところから、急に風が強くなってきていた。いつもは波穏やかな大野瀬戸の狭い海峡にも、牙きばのような白波が見え隠れしている。高い空をゆく雲の流れが異様に速い。

気象庁はかなり早い時点で九州、四国、中国地方のほぼ全域に暴風雨波浪警報を発令した。「大型で非常に強い」と形容された台風十九号は、中心の気圧が935ヘクトパスカル、最大風速は五十メートルという勢力を維持したまま北上をつづけ、午後八時ごろには、広島県付近を通過する見込みであった。

友理子が表に出たとたん、すぐ目の前を小さなつむじ風が走って行った。

ゴウゴウという風音と、上空はるかをカラスのように飛ぶ黒い千切れ雲ちぎに脅えながら、友理子は足を速めた。浄衣じょうえの袖そでや、袴はかまの裾すそが風にあおられ、体ごと運ばれていきそうになる。

港から厳島神社へつづく参道に並ぶ土産物の店は、はやばやとシャッターを下ろしている。参道ですれ違った団体の観光客は、誰もが一様に背を丸め、心急せくように棧橋さんげしへ向かっていた。白い浄衣に緋ひの袴はかまをつけた内侍姿の友理子が通っても、チラツと振り返るだけだ。いつもなら珍しがって、一緒にカメラに収まってくれと頼まれたりもするのに、それどころ

ではないらしい。

群の中から「もうじき、連絡船が欠航になるそうじゃ」という声が聞こえた。

(岡野さん、間に合うじやろうか?)

友理子は同僚の岡野徳子（おかののりこ）のことが気になった。徳子是对岸の廿日市市（はつかいち）の自宅から通っている。帰りの時刻まで、船が欠航にならなければいいのだが――。

町家の角を曲がったとき、男が後ろ向きに歩いてくると、あやうくぶつかりそうになった。男は小ぶりのポストンバッグを下げて、弥山（みせん）の頂きの方角を見上げながら、ほとんど後ずさりするように歩いている。

友理子が飛び退いた気配で、男はびっくりして「ひゃっ」と声を発して身構えた。まるで何者かに襲われるとでも思ったような様子だった。しかし、友理子を見てほっとして、「どうも」と軽く会釈した。悪い人間ではなさそうだ。

友理子が「どうも」と挨拶（あいさつ）を返すと、男は二歩三歩と近づいて、「ちよつとうかがいますか」と言った。

四十歳代なかばぐらいだろうか、中肉中背で、やや細面（ほそおもて）という以外、これといって特徴のない顔だ。むろん、まったく見知らぬ顔である。

少し前屈みになって近づくと男の様子には、友理子の内侍姿にいくぶん敬意を表したような気配があった。

「紅葉谷公園のお墓というのは、どこなのでしょうか？」

「は？……」

友理子は「墓」という言葉に、思わず体を引き、身構える恰好かっこうになった。

「すみませんね、とつぜん妙な質問をぶつけて」

男は友理子の警戒心を察知したらしく、苦笑しながら頭を下げた。

笑うと、いくらか人なつこい顔になる。

「紅葉谷公園にお墓があると聞いてきたのですが、いくら歩き回ってもどこにも、それらしいのが見当たらないのです。あなたは神社の方とお見受けしたもので、たぶんご存じではないかと思ひましてね」

「あの、紅葉谷公園のお墓ですか？」

友理子は問い返した。

「はいそうです」

「紅葉谷公園には、お墓なんてありませんけど」

「えっ、ほんとですか？」

男は素朴に驚いている。

「はい、紅葉谷公園にかぎらず、神社の近くは清浄な場所ですので、お墓みたいなもん、あつたらいいんです」

（何をあほなことと言うとるの……）と、友理子は無意識のうちに、少し高飛車な口調になっていたかもしれない。実際、友理子は男が口にした、神域を穢すような言葉に苦々しいものを感じたのだ。

厳島神社をいただく「安芸の宮島」はその名のとおり神を祀る島、いわば全島が聖域といっつていい。

宮島の本来の名は「厳島」で、昭和二十五年までは町名も「厳島町」であった。

厳島は古代から信仰の島として知られる。厳島神社の創建は推古天皇元年（593）という説がある。その信憑性はともかく、弥山を主峰とする島の姿を前にして、対岸の安芸国佐伯郡の住人たちが、自然発生的に厳島を信仰の対象にしたことは事実だ。

「厳島」の語源は、祭神「伊都伎島神」からきている。

厳島が注目されるようになったのは、平清盛を中心とする平氏一族の厳島信仰によるところが大きい。清盛は壮年期に安芸守としてこの地に赴任し、現在わが国屈指の国宝である、平氏一門の写経「平家納経」を奉納するなど、厳島神社を深く崇敬した。

ところで、日本の「神」にとっては、人間に限らず、あらゆる生き物の死や死骸は、穢れ中の穢れとして扱われる。死者ばかりではない。かつては女性の産褥も穢れとして敬遠されたのである。

もちろん、死者が厳島神社に近づくことは絶対のタブーだし、厳密にいうと、厳島神社の

中心を南北に走るラインを、死者が越えることも禁じられている。かりに厳島神社より西側の住人が死んで、遺体を東側に運びたい場合、遺体は海岸から船に載せられ、はるか沖合を回って、東側へ移動するのである。

まして、厳島神社の真裏とっていい位置にある紅葉谷公園は、厳島神社から霊山である弥山へ向かう道の途中に当たる聖域そのものだ。そんなところに墓地などありようはずがない。

友理子のきつい口調には気がつかなかったのか、男は「おかしいな……」と、しきりに首をひねっている。

「たしかに、紅葉谷公園の墓と聞いて来たのですけどねえ……」

当惑しきった様子で愚痴っぽく呟いて、空を見上げ、腕時計を見て、「あつ、もうそろそろ来ちゃうな」と、急にソワソワした。台風が迫ったことを言ったのだろうか。それとも誰かを待っているのだろうか。夕暮れのせいばかりでなく、男の表情は青ざめて見えた。何か不測の事態が生じて、よほど困ったことになったらしい。

「どうもありがとう」

男は友理子に礼を言い、辺りに気を配りながら、土産物店の角に隠れるように立ち去って行った。

社務所に帰り着いたとき、平服姿に着替えた岡野徳子が現れた。権宮司の指示で、とくに

用事のない女性は、早々に帰宅することになったということだ。

「ごめんね、私、お先に帰るわ」

徳子は空模様を見上げながら言った。

「うん、かまわんよ。急いだほうがええわ。船が欠航になるとか言うてたし」

「まだ大丈夫じゃと思うけど」

時刻は五時を回ったところだ。内侍の勤務時間はとくに厳密に定めていない。大雑把おおざっぱに「明るい内」というのが不文律のようなもので、ことに友理子のように住み込みの内侍は、太陽が空にあるあいだが勤務時間といえる。九月末のこの時季、ふだんならまだ明るく、参拝客は境内を散策したり、お守りや御札を求めているころだ。内侍たちはその応対に追われているはずである。

徳子につづいて、自宅通勤の四人の内侍たちが、つぎつぎに帰って行った。

残った三人の内侍とともに、友理子もふだん着に着替えた。男性の神職たちも身軽に動けるような服装になっている。

寮に引き上げる前に、友理子は回廊まで出て様子を見た。海は、波というよりもうねりが高い。満潮にかかって大鳥居を浸しはじめた海面は、時折、盛り上がるようになって、余波がヒタヒタと大舞台近くまで寄せてくる。このふんだと、すでに岸壁付近は小型船舶の接岸が危険な状態になっているにちがいない。

宮島の連絡船はJRと、民間の「宮島松大観光船」という会社が運航しているが、岡野徳子が引き上げてまもない午後五時十分に、まずJRが経営する連絡船が休航し、午後六時には民間の「松大」船のほうも休航したと知らせが入った。

陽が沈むと同時に風雨がいつそう強くなってきた。峰から吹き下りてくる突風が、紅葉谷の木々をゴウゴウと鳴らし、ペキペキと小枝のはぜる音が不安をかき立てた。

宮司以下、神職たちは神社に居残り、警戒に当たることになった。

九人いる内侍は四人が島内在住で、その内の二人が寮住まいだが、六時半までには全員が神社を退出した。友理子は寮に戻ると、はやばやと食事を済ませ、窓のカーテンを引いて、いつでももぐり込めるように、ふとんを敷いておいた。

テレビの台風速報は、台風の中心が安芸地方に接近する様子を刻々報じている。アナウンサーは緊迫した声音で「満潮時にぶつかりますと、高潮のおそれがあります。進路にあたる地方の沿岸部は嚴重な警戒が必要です」と言っていた。

風の強さは、これまで友理子が体験したことのない猛烈なものだった。寮はまだ新しく、しつかりした建物だが、まるで地震のように細かく揺れた。窓はいまにもはじけ飛びそうなくらい内側に膨らんだ。

こわごわと窓辺に近寄り、カーテンの隙間から覗くと、一つ置いた家の屋根瓦がパラパラと剥がれ飛ぶのが見えた。紅葉谷から峰々にかけての一带で、モミの巨木が倒れるおそろし